

スピーカー PMC 音質比較 MB2SE

PMC MB2SE

希望小売価格

¥3,000,000 (ペア)

周波数特性：20Hz～25kHz●入力感度：89dB SPL (1W,1m)●クロスオーバー周波数：380Hz/ 3.8kHz (-24dB/oct)●インピーダンス：8Ω●入力コネクター：トライワイヤリング対応●サイズ：W380×H870×D555mm●重量：58Kg(1台)●スタンド：W374×H536×D502mm●スタンド重量：17Kg (1本)

MB2SEの外観サイズと形状は、旧モデル MB2 と同一です。これはスタジオなどで壁に埋め込まれたスピーカー (MB2) を新型に入れ替えるときにトレードインを可能とするためです。また、PMC オリジナル技術の「トランスミッションライン」を採用したキャビネットはその形状を変えられません。これらの理由により、MB2SE はデザインはそのままに外観の仕上げの刷新のみ行われています。



上：刷新されたユニットのベースプレート

右：ツイーターとミッドレンジのユニット



ユニット

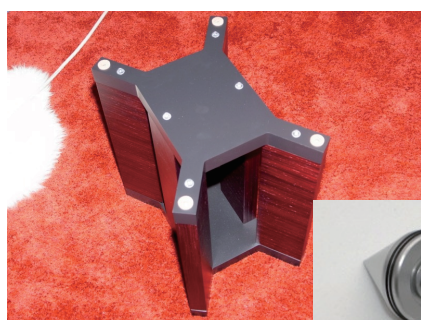
ユニットには振動板や磁気回路には変更がなく取付プレートの形状と素材などのみ変更されているようですが、スタジオなどで新旧のモニタースピーカーが混在した状況でサウンドソースのマスタリング作業などが行えるようにするため、またすでに旧モデルで耳が馴染んでいるエンジニアへの配慮だと思います。

下：ウーファーユニット



上：ターミナル

下：スパイクをに取り付けたところ
※写真のスパイクベースは付属しません。



上：MB2/SE 専用スタンド

右：付属するスパイク材質は軽合金
黒い部分はスリッパ止めのゴムリング



上：スタンド側面と付属するスパイク

スピーカースタンド

SE モデルには、本体と仕上げが同一の本格的なスピーカースタンドが付属します。高さ調整機能が備わるスパイクが付属しますが、スパイクベースは付属しません。スパイク先端は厳しく尖っており、スパイクベースを使わないと床とスパイク先端の両方を痛めると考えられます。上面四隅にはコルクのリングが貼り付けられ (写真左上の一番外側の大きい方の球形の部分)、コルクがスピーカーの底面と接触します。

音質テストは、スタンドをスパイク未使用でカーペットの上に直接置くセッティングで開始しました。





UX1 SE LIMITED

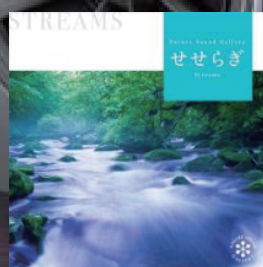


TERA CRYO LIMITED



B1a

MB2SE



せせらぎ

2本のスピーカーの中央に音像がコンパクトに定位します。鳥の声は遙か遠くから聞こえ、精密なセッティングを施してなくても音の広がりや立体感は驚くほど正確です。そ

合っています。測定すれば、音波の位相がきちんとそろっていることを確認できるでしょう。



赤田首里殿内 (アカタ スンドウンチ)

イントロのシンセサイザーの音が部屋いっぱいに広がります。ボーカルはきめ細かく滑らかで、女性らしい艶もよく出ます。

ただ間奏部の鈴の音の高域の芯の強さがハードな振動板を使う TAD R1 に及ばないので、改善を期待してジャンパーを付属品から 6N 単線に変えました。

本来ならば AET などの高音質ジャンパーを使いたところですが、今回は MB2SE の「素の音」を探るため、あえてそれらの高音質ジャンパー線は使いませんでした。接続ケーブルも 6N 導体を使った Space & Time の 3,500 円 / 1m 程度の製品を使っています。



付属品のジャンパー線 (棒)



交換した 6N 単線のジャンパー線

れぞれの音の質感や方向と距離が手に取るように分かるのは、PMC らしいモニターの世界です。この立体感の再現性のすばらしさから、グレードアップされたキャビネットやプレートにより、ユニットの反射音がきめ細かくコントロールされていることが伺えます。

水のはじける音が滑らかに聞こえるまろやかさを感じる自然な音は、高域にやや固さと細さを感じた MB2 から音質が大幅に改善されていることが伺えます。初代の MB2 との比較 (記憶での) では、音の細かさや明瞭度感が大きく改善されていると感じます。

高い音と低い音の質感、タイミングがどんぴしゃりと

ジャンパー線変更後



せせらぎ + 6N 単線ジャンパー

ジャンパー線を変えると高域がさらに滑らかに柔らかくなりました。その結果、高音のメリハリ感は若干削がれましたが、水の音の柔らかさと鳥の声の表



赤田首里殿内 + 6N 単線ジャンパー

オリジナルジャンパーではやや固く細く感じられた高域がより滑らかになって、音の密度感が高まります。高域はさらにきれいに伸びますが、中域の厚みがそ

れを上回るので音場は濃くなります。

初期の MB2 が感じさせた凍と張り詰めた雰囲気とはずいぶん違う滑らかで暖かい音ですが、解像度や明瞭度もずいぶん高められています。BB5 ほどの低域の量感や厚みはありませんが、中高域の解像度と密度はそれを上回るでしょう。

間奏の鈴の音は超高域の固さが足りませんが、これは振動板が柔らかいソフトドーム型ツイーターの限界か

もしれません。振動板の強度が不十分だと、楽器の発生する「衝撃音・衝撃波」が再現されないのです。しかし、それと引き替えに高域の厚みと滑らかさが実現するのがテクスタイルドームツイーターですから、この違いは好みの範疇といっても良さそうです。また、ソフトドーム型ツイーターの弱点を補うために、AIRBOW の波動ツイーターを使うのもよいと思います。声はリアルで生々しいですが、何も足さず、何も引かない感じです。従来モデルほど張り詰めた緊張感のあるサウンドではありませんが、精密さ端正さは PMC ならではの美点を受け継いでいます。

情の再現性が改善されました。また、より遠くから聞こえなかった鳥の声 (郭公の声) も聞こえるようになって、音の広がりの限界 (境界) が広がりました。

スピーカー中央に定位する水の音はやや遠くなり、スピーカー後方に大きく音が広がります。2本のスピーカーの中央にある窓越しに、生の景色を見ている (聞いている) ような雰囲気。すばらしく精密なこの定位感は、PMC ならではの感じます。

逸品館っ小ネタ広場

この DM には羊が 5 頭くらい隠れています。見つけてあげてください♪



スピーカー PMc 音質比較 MB2SE



MB2SE をきちんと評価するためには「足下の強化」が重要と分かったので、スタンドに純正スパイクを取付け、スパイクベースに AIRBOW Metal Base L を追加しました。



赤田首里殿内

音が出た瞬間驚きました。音の細やかさが 2 倍くらいアップしたからです。イントロ部分のシンセサイザーの密度が半端じゃありません。高原の薄い空気が、いきなり海拔 0m に

なったのではと感ずるくらい濃くなります。

高域の速度も大幅に向上し、高音が頭の中までたたき込まれるほど強くなります。音を聞いているという冷静な感覚が消えて、音波の荒波に身体が翻弄される雰囲気です。音質の改善は想定していましたが、まさかこれほどとは思いませんでした。最初に行った簡易セッティングでは引き出せなかった音が出始めて、ようやく MB2SE が本領を発揮したと感ずます。そこでさらに違う曲を聴いてみました。



リザ・フェルシュトマン バッハバイオリンソロ (SACD)

心を無にして音と対峙すれば奏者とリスナーの隔たりが消えて心情が一つの空間に同居するように感ずるほど、バイオリンと弓の角度

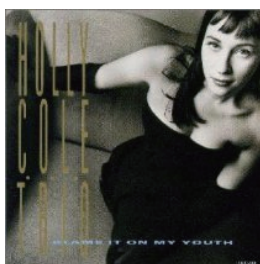
だけではなく奏者の体の傾きさえ見えそうほど繊細で正確なサウンドです。バイオリンとそれを取り巻く空気、演奏されているスタジオの響き以外は何も聞こえませんが、奏者の間近、マイクの位置で生演奏を聴いているようなサウンドです。

ただ、やはり演奏を心で聴いているというよりは、音を聞き、聞いた音から心の中で音楽を組み立てる雰囲気です。例えるならライブを味わうというよりも、コンクールの審査をしている感ずです。

色即是空、そして空即是色。すべての虚飾を廃すると、鮮やかな色彩が見えてくる。そういう「禅」に通じるようなサウンド。この驚くほど細やかで精緻なサウンドは、PMC 以外のスピーカーでは得られない独自の世界観です。

シゲティエのバッハが、ベストマッチしそうな虚飾を廃したサウンドでフェルシュトマンが鳴りました。レポートを書くことを止めて、耳を PMC が描き出す世界に投げれば、心は無になって自由に羽ばたけるでしょう。

音楽を艶やかに解釈するのではなく、ただ楽器の美しい音に陶醉できるサウンドです。



Smile

イントロのウッドベースがずしりと腹に響きます。ホリーコールの声は、やや乾いてもう少し艶がほしいと感ずますが、中域のボリューム感は抜群です。従来の MB2 と SE

Series を比べるなら、中域のボリューム感の向上がもつとも異なる部分だと思います。MB2SE の中域の濃さは BB5 に匹敵するほどです。

さすがに 38cm ウーファーを搭載する BB5 ほどの空気が揺れる超低域は再現されませんが、MB2SE でも耳に聞こえる範囲の低域はほぼ完璧に再現されます。ボーカルはスピーカーより前リスナー近くにとってもコンパクトに定位し、まるで小型スピーカーのようです。その繊細な明瞭感からホリーコールがマイクの近くで歌っている様子が手に取るように分かります。ピアノはボーカルの後方に広がって定位し、ボーカルの分離感・距離感は抜群です。

ピアノの音は一つ一つの響きが完全に分離、整理されて聞こえます。音の濁りの少なさ、再生される音の完結性（録音された音に最も近い）という意味では、や



はり PMC は今も世界の最高峰です。MB2SE を聞けば、あの高性能な MAGICO ですら、甘美な響きが付加されていると感ずるほどです。ただし、やはりテクニカル振動板を採用するツイーターの限界で、TAD や MAGICO が搭載するベリリウム振動板のような「強い音（衝撃音）」までは再現されませんから、この部分はエージングと、セッティング、組み合わせるシステムで解決しなければならないようです。

試聴後感想

MB2SE の価格は、発売初期の BB5 に近いほど大幅に値上がりしました。

スパイクを使うまでは、その音質は BB5 には全く及ばないイメージでした。しかし、スパイクを使うことで部屋の空気をゆっくりと揺らすような重低音を除き、MB2SE のクオリティーが BB5 を超えるようになったのです。

SE Series は、それまで再現しなかった細やかな音が再現します。それぞれの音の明瞭度が向上し、キャビネットの響きもさらに少なくなっています。それらの相乗効果により、PMC らしい完璧に整合した緻密で精緻なモニター的な傾向は強められています。演奏する曲によっては音楽を楽しんでいるというよりは音楽を分析している感ずを覚えるようになりますが、「何も足さず、何も引かない」といえる PMC のパーフェクトな世界は一層完成度を高められています。

エージングが完全に終わってなくても分かるのは、PMC が SE Series で目指した完璧性と濁りのなさです。クリアでクリーンなサウンドですが、完全に無色透明なバックグラウンドに、淡い色彩とほのかな艶で音楽が展開します。

水の中の一滴の水は探せなくても、オイルの中の一滴の水はすぐ見つかります。同じ透明な液体を混合していても、そのわずかな違いさえ克明に再現する力を MB2SE は持っています。PMC の名にふさわしい比類なき解像度と忠実性が与えられたスピーカーです。